

仁科記念財団編纂

# 原子爆弾

広島・長崎の写真と記録

原爆戦争の様相を正確に伝えるために――

二五〇葉の未発表写真を中心として

写真班・学術班、すべてそこにいた人びとの

資料を加える決定版！



《本書の内容》

写真編

185図, (他に本文写真挿図約214)

序

朝永振一郎

本文 (大略)

I 発 端

II 新型爆弾

その日の広島・最初の報道

初期救護活動

似島臨時救護所

宇品船舶司令部

焼け残った病院

III 初期調査はじまる

「判決」最初の新聞発表

IV 放射能を追って

仁科博士の西下

「観測するモルモット」

未知の原爆症

いわゆる原子爆弾症

V 長 崎

爆発の瞬間

長崎地区憲兵隊報告

長崎医大の壊滅

避難と救護

諫早海軍病院・大村海軍病院

新興善救護病院

VI 学術調査団

原爆調査特別委員会

日米合同調査団

VII 映画採録

「広島・長崎における原子爆弾の影響」

同関係記録

VIII 資 料

仁科芳雄・荒勝文策・杉山繁輝

木下良順・三宅 仁・針尾海兵団

IX 終 章

人間の破壊、都市の壊滅

原爆記録写真について

後

記

山崎 文男

# 刊行のことば

朝永振一郎

仁科記念財団は故仁科先生の指導と援助によつて完成されたいわゆる「原爆映画」がアメリカに持ち去られ、原爆災害に関する貴重な資料が日の目をみないでいることをかねがね残念に思っていた。そこで財団は、一方では故仁科先生と親交のあつたアメリカの科学者たちに対して、この映画が一日も早く日本に引き渡されるようアメリカの有力者に働きかけることを依頼すると共に、他方日本国内においては、原爆災害の調査に従事された科学者、報道関係者、映画撮影者のかたがたに協力を求めて、一つのまとまつた解説つきの記録を編纂することにし、その構成等について案をねりつつあつた。

ところが原爆映画はアメリカ当局から日本側に引き渡されることになり、それとともに、記録編纂の計画は急速に具体化し、ここに内容見本をひろく提示できるようになった。

この記録が、原水爆戦争のもたらす恐るべき様相を正確に世人に伝え、そのことによつて、核兵器は二度と再び使われてはならぬという世論の形成にそれが役立つことは、編纂者の切なる願いである。

原子力委員・立教大学教授 田島英三

「広島・長崎」についてすでに多くの書物と写真集とが公にされていますが、なかでも仁科先生の指導になる映画「原爆の効果」は、広島、長崎を語るかけがえのない歴史的文献であります。私達は、この映画がアメリカから返還されたのを機会に、この映画を中心として終戦前後の貴重な資料や写真とをこれに加え、再編集して後世に伝えることを計画しました。これはこの映画の作製に直接たずさわつた科学者と撮影スタッフの責任と考えます。編集にあつては「正確」を期し、終戦前後の混乱のなかにつくられた資料を多くとりいれましたので未発表の貴重なものも含まれています。これが歴史的記録として価値あるものとなり、同じ過ちを再び繰返さないための一助となることを願っております

原爆映画プロデューサー 加納竜一

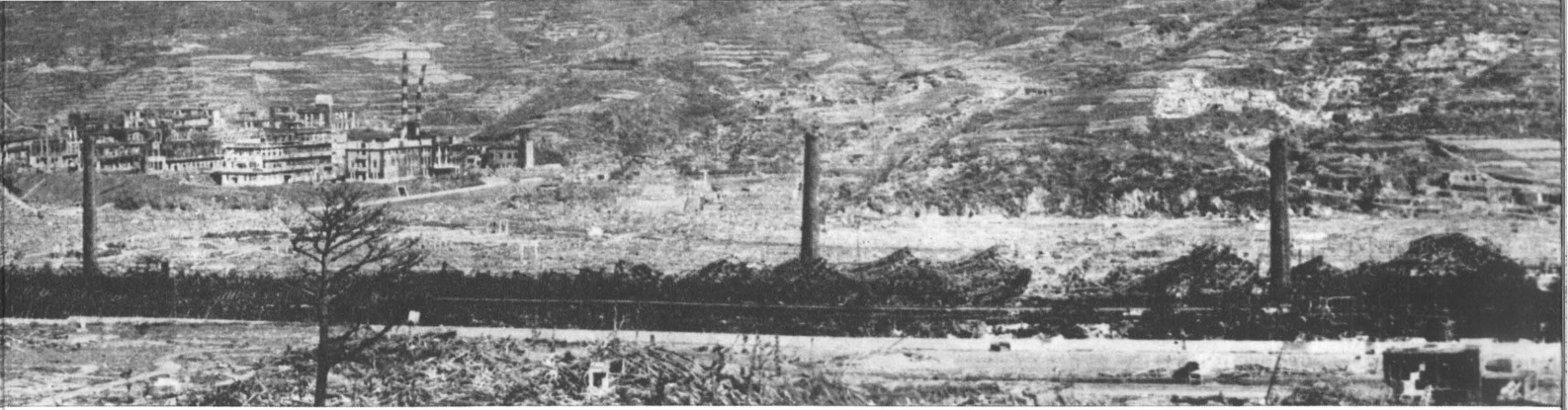
日本の二つの都市を壊滅した原子爆弾、その悲惨な被災状況は永らく国民の目から消されていた。仁科博士の原爆についての短い発表が新聞紙上に出たのも終戦の日で、その紙上で始めて公開された原爆被害写真は駅の時間表（手書き）の黒い文字のところが焼けた一枚の写真であつた。その頃日本の科学者、医師たちは広島と長崎ですでに原爆の恐るべき被害にとりくみ、ある程度その実態を明らかにしていたのである。敗戦、軍の解体、つづいて占領。原爆被害の多くの研究資料は国外にもち去られた。これら困難の中で、当時の原爆記録映画はつくられた。幸い今回の出版計画によつて各種の資料を後世に残すことが出来れば、われわれの喜びだけでない。多くの人びとの要望にもこたえうることもなろう。

「原爆白書」の運動への一助となることを願うものである。

日本原子力研究所理事 山崎文男

広島・長崎の原子爆弾の災害、殊に放射線障害が大規模に発生していることが明らかに及んで、文部省学術研究会議は特別委員会を設け災害の総合的な調査研究に乗り出した。これに同行して撮られたのが「原爆映画」である。幸い映画撮影に随行した写真家によるスタイル写真が二千枚も保存されていることが判り、これを中心に軍報道部、新聞社による記録写真、調査団員による資料写真などの中から重要なものを選び、調査団員自らが映画では果せなかつた解説をつけることを原則とし、永く後世に伝えるに値する原爆被災の記録写真の集大成を刊行するのが本書出版の主旨である。科学的に正確を期したこの写真による被災記録を原爆が再び繰返されることのないために役立てたい。





日本学術振興会々々長 茅 誠司

茅 誠司

昭和二十年八月七日、軍の人から広島に一発の爆弾が落ち、全市が壊滅した、アメリカは原子爆弾だと言うが、という質問が当時科学者によって作られていた「陸海軍技術運用委員会」にきた。二、三の原子物理学の専門家は、原爆なんてものはそんなに簡単に作れるものではないと否定したが、その後現地の仁科先生から送られてきた銅線の放射能測定から、これが原爆であることが判った。私共はその悲惨極まりない広島の様々な物語りを今もって忘れない。これと八月九日の長崎の爆弾をこの地球上で最初にして最後のものとする為には、その科学的記録、特に写真による報告書が絶対必要である。今日ここに出版をみるに到ったことは遅すぎたにしてもしなければならぬことであった。

日本医師会々々長

武見 太郎

原爆の記録は人類史の一コマとして、学問的にも、社会的にも正しく残されなければならない。本書は当時の最高の指導者であった仁科芳雄博士が自ら指導されたもので、先生の学者として、又人道主義者としての面が画面に滲み出ている筈である。原爆投下の頃先生の下で勉強していた私は、先生の許しを得て、元内大臣だった牧野伸顯元伯爵を通じて、翌日は天皇にその真実を伝えることが出来、平和回復の端緒となった。

原爆災害の真実を知ることが日本人の権利だと思うし、世界平和への日本人の脊髄としたいものである。

ノースカロライナ  
大学副総長

ハリ・C・ケリー

私が日本の科学者に深い敬意を表する主なる理由は、科学者は世界平和のための条件をつくり出すことに独自の責任をもつべきだとの彼らの信念であります。今回の出版は、まさにこの信念の証明でもあります。日本は原子爆弾の直接の被害をうけた唯一の国です。これらの科学者が、この出版により世界中の人びとに教育的責任を果たそうとしていることは尊敬に値します。彼らがこの怖るべき武器が二度と使われることのないよう

評論家 田中慎次郎

放射線、熱線、爆風の人工の嵐が一瞬のうちに広島、長崎の町々を壊滅し、何十万人の生命を奪ったその日から起算して、四半世紀がすぎた。しかし無名の死者の名は今も探しもとめられ、原爆症による新しい死者の名は、年ごとに書き加えられて行く。母の胎内で放射線をあびて生れた小頭症の人たち。原爆症でいままも臥床している人たち。今後の長期の追跡調査によって判明するかも知れぬ遺伝学的影響。広島、長崎の被爆は、二十五年前の出来事として過ぎ去ってしまったのではなく、完結したのでもない。過ぎ去った歳月によってではなく、無知があの日、広島、長崎を忘却させる。日本人ばかりでなく、世界中の人々が、もつともつと、真実を知らされねばならないのだ。この要請に、仁科記念財団の編纂にかかる貴重な歴史的記録はこたえてくれるだろう。

原子力委員

武藤俊之助

科学の成果が技術に実を結ぶまでの時間が今日ほど短くなった時代は一寸類がない。しかし科学技術の成果は善用の目的で具体化されるにしても少しでも注意を怠ると人間に災害をもたらすことさえある。前者の痛烈な体験は原爆による放射線災害であり、後者の実例は公害問題として世上に喧伝されている。科学技術の応用に際しては何よりも人間の存在を忘れてはならないと思う。

われわれ日本人は原爆による災害をうけた唯一の国民である。それだけに原爆災害に関する種々の資料を所有しているわけで、これらは人間の将来を戒むべき、人類の共有資料である。仁科記念財団の「写真による原爆災害記録」は正にかかる貴重な学術資料として広く一般にすすめたいと思う。

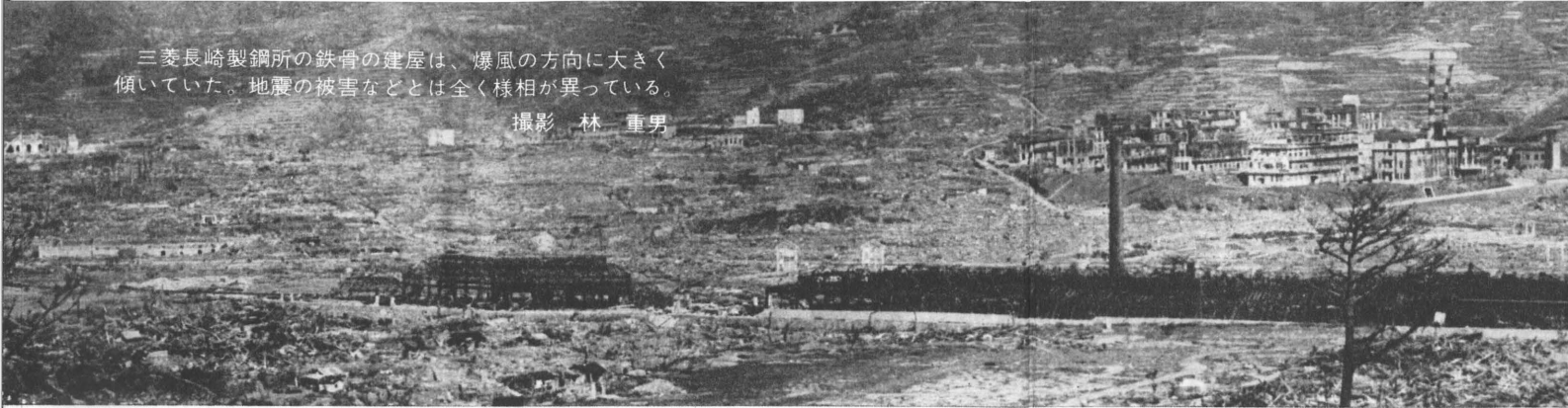
評論家 坂西志保

「時の癒しの術」は人間に与えられた大きな恩恵の一つで、その濾過作用によって私たちは苦難を乗り越えて前進する勇氣を与えられている。しかし、人間には忘れてよいことと絶対に忘れ



三菱長崎製鋼所の鉄骨の建屋は、爆風の方向に大きく傾いていた。地震の被害などとは全く様相が異っている。

撮影 林 重男



元内大臣だった牧野伸顕元伯爵を通じて、翌日は天皇にその真実を伝えることが出来、平和回復の端緒となった。

原爆災害の真実を知ることが日本人の権利だと思うし、世界平和への日本人の脊髄としたいものである。

ノースカロライナ  
大学副総長 ハリー・C・ケリー

私が日本の科学者に深い敬意を表する主なる理由は、科学者は世界平和のための条件をつくり出すことに独自の責任をもつべきだとの彼らの信念であります。今回の出版は、まさにこの信念の証明でもあります。日本は原子爆弾の直接の被害をうけた唯一の国です。これらの科学者が、この出版により世界中の人びとに教育的責任を果たそうとしていることは尊敬に値します。彼らがこの怖るべき武器が二度と使われることのないようにとの願いをもつて、原子爆弾の怖るべき影響を世界の仲間たちには知らせようと努めていることを、私は知っています。一日も早く出版が望まれるゆえんです。

作家 大佛次郎

原爆、原爆と、声をやかましく、どなり続けるほど、世間は原爆に背中を向けがちです。どなっている人たちが、原爆のことを、実は知らずにいるので、その楽屋内が見すかされ、大きな声ほど空虚に響きます。

「原爆」や「原子爆弾」の、肉迫する危険の下に在って「原爆」そのものの形態についても構造、その底知れぬ怖ろしさについても、ほんとうは私どもは、何も知らされないで居ます。これは恥辱に値することか、怖るべきことか私には言えませんが、とにかく変なことだし、この白紙同然の無知から、明日にもどんなに怖ろしいことが起生するかも考えざるを得ない。原爆の理論については、もとより無知文盲。自分も何も知らずに、ただ原爆、原爆と、喚きまわる人間に対して、やがて社会が倦きて嫌になる日も在りそうに思われます。その危険こそ及ぼす影響が大きいだけに最も恐怖に値します。この本は、その盲目の眼を、科学的に真実の姿が見えるように開いてくれるものと信じます。この本で、新たに原爆のことを今よりも深く考えるようにしましょう。

害であり、後者の実例は公害問題として世上に喧伝されている。科学技術の応用に際しては何よりも人間の存在を忘れてはならないと思う。

われわれ日本人は原爆による災害をうけた唯一の国民である。それだけに原爆災害に関する種々の資料を所有しているわけで、これらは人間の将来を戒むべき、人類の共有資料である。仁科記念財団の「写真による原爆災害記録」は正にかかる貴重な学術資料として広く一般にすすめたいと思う。

評論家 坂西志保

「時の癒しの術」は人間に与えられた大きな恩恵の一つで、その濾過作用によって私たちは苦難を乗り越えて前進する勇氣を与えられている。しかし、人間には忘れてよいことと絶対に忘れるはならぬことがある。原爆災害は現在はもちろん、将来に伝えなければならぬもので、それを私たちは義務づけられている。この書が全世界への警鐘となり、地球の隅々に至るまで四十億の人々が、「ノー・モア・ヒロシマ」を口にし、全人類の悲願にまで昇華するのを私は念願するのである。

写真家 木村伊兵衛

広島、長崎に原爆が投下された。このむごたらしい現実を、なんとしてでも写真に記録したいと、私たち仲間の報道写真家は八方に手をつくしたが、どうにもならなかった。終戦、虚脱状態の中で一ヶ月は無駄に過ぎ去った、その矢先に、日本映画社加納電一氏から普通写真撮影の広島行の話があった。仲間はいつせいに菊池俊吉、林重男の両君をおした。カメラはライカ2セット、現地は、なに一つ残さない焼野原、フラットになるのをおそれて、コントラストのつくフィルムを買いつめた。九月下旬から約一ヶ月間、かげ一つない炎天下と放射能をきづかって、両君の帰りを待ちつづけた。さて現像だ。フィルムに放射能のカブリがきていないかと気にしたが、その心配はなかった。幸いに、映画フィルムとちがって米軍に没収されなかった。このたびの出版で、両君の仕事が、歴史の記録として後世に残り、あの時の事実を、もう一度ゆさぶり起す役目となれば、なによりもうれしいことである。

推薦者のことば



# 回想

—関係者による—

毎日、町の方々に火葬の煙が絶えなかった。8月末、この日も広島西部・己斐方面に火葬の煙が立ちのぼっていた。 撮影・佐々木雄一郎

## 原子爆弾と仁科芳雄博士

広島に原子爆弾が投下された直後、現地に行き、それを原爆と判定されたのは仁科芳雄博士であった。

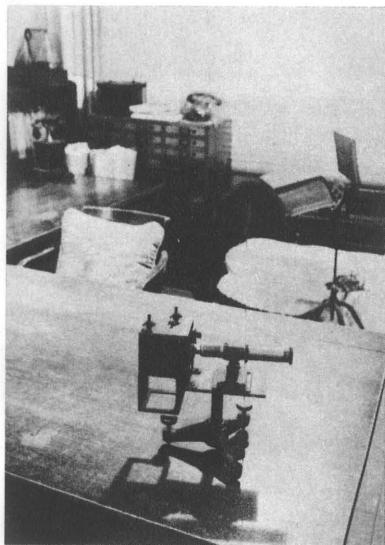
日本映画社は、「原爆記録映画」の製作を企画し、仁科博士の下で、日本学術研究会議の原爆災害特別調査団の映画班として現地撮影を進めた。10月中旬長崎で、米軍側から撮影中止の命令を受け、同時に学術調査の公的な活動も日米合同調査団の組織に加えられている医学班以外のすべての公的な調査研究を中断させた。それから12月中旬までの2ヵ月間、仁科先生はほとんど連日、米軍関係者と連絡して、調査と撮影の再開をはかれたが、映画はついに没収された。(未完成の映画では破棄散逸してしまうからという日映側の提案により、米軍側の監督下に、長崎の再撮影とこれに並行する放射能強度分布測定が広島・長崎で行われた。)「原爆映画」はこうにして、あらゆるフィルム一切が米国へもち去られた。

「原爆映画」の返還交渉をはじめから7年、映画は制限解除となって戻ってきた。いまこれを学術資料としてみると、当時の変則的状況下でつくられたこの映画が正しく理解されるためには、補助資料作成の必要が生れた。

幸いなことに当時映画撮影に同行した写真家の記録写真が約2,000枚 保存されている。それに被爆直後、軍属写真家などの撮影したもの、学術調査団のメンバーが撮影したものなどを加えると3,000枚を越える写真がある。これらの写真は、一部はすでに公表されているが、体系的に整理された写真記録としては発表されていない。

これらの写真資料を中心において、原爆災害の調査研究の経過と内容を編纂し、多少の補足解説をつければ、一応各分野の科学者が原爆に対処した実態を再現することができる。そして、仁科先生が、映画班に指示された企画原案が、広島・長崎の被災地撮影によって、いかに具体化され、どのように表現されようとしていたかを、当初の意図にもとづいて理解できると思われる。

広島が「新型爆弾」で壊滅したとき、軍はそれが原子爆弾であるというトルーマン声明の真偽に関し仁科芳雄博士の見解を求めた。英米の原子物理学者たちの力量を熟知していた博士はトルーマン声明を一読した瞬間、年来の不吉な予感の適中を直感したが、とにかく実際の状況を見なくてはと、貧弱な飛行機に乗せられて現地に急行した。そして研究室の人々の許へは銅線や石塊や草の葉が届けられ、銅線には放射能が認められた。石塊や草の葉の採集は、原子爆弾なら「死の灰」が伴うことを博士が適確に推察したためだが、後に占領米軍は「空中原爆では放射能をもった塵は成層圏まで昇ってしまい、局地に降るはずはない」と主張した。その主張の誤りはまもなく仁科博士門下の物理学者たちの調査によって明



旧理化学研究所構内仁科研究室（現仁科研究財団）机上の放射能測定器は故博士が当時愛用のもの。

らかにされた。

ところでアメリカ側の発表では「75年間人間も住めず、草木も生えない」と述べてあった。それゆえ現地の生存被災者や救護活動に赴いた人々の安全を考えて、陸軍軍医学校の第一次調査団が送られた。その結果、残留放射能は救護活動を危険にさらすほどではないことが判った。その調査団は終戦後ただちに一旦引きあげたが、半月ほど後に、被爆した生存者に放射線病の症状が顕著になり、つぎつぎと調査団が送られるに至ったのである。

そのような初期の頃の状況を伝える写真はきわめて希少である。今回の写真集には「帰ってきた原爆映画」の場面にもない写真が載せられており、貴重な資料として期待される。

（千葉大教授 当時仁科研究室）

その頃、九大理学部にいた私達がGMカウンターを持って長崎に出かけたのは爆弾が落ちてから4日目の8月13日のことである。要塞司令部の世話になり、まだ生々しい爆心地付近から一握りの土を採って来た私達は、その夕方、カウンターのスイッチを入れた。しかし電圧が低くて働かない。あきらめて、翌朝再びスイッチを入れたところ、幸い短時間ではあるが働いて自然放電の2倍の計数を示した。たった6分間のデータであるがこれが私達の、原子爆弾の放射能との最初の出合いである。終戦の前日のことであった。

それからしばらくたった。9月はじめ九大医学部の第2回の長崎調査団に加わった私達はローリツェン検電器で爆心地付近の放射能を測った。福岡に帰ったあと、長崎からいろいろのものが送られて来た。それを片っぱしから測ったがどれにも放射能は見られなかった。そんなとき、次の長崎行も間近にせまったある日、期待もせずに測った木の葉にはじめて放射能を見出したのである。その葉は一部変色していた。何かが落ちてきてついたのだという。私達はその葉のとれたあたりから放射能を追いかけて考えながら長崎に発った。

そして9月28日県庁に顔を出した私達はアメリカの調査団が西山地区に強い放射能を見出したことを知らされた。そこは私達の木の葉の地点から山の方に入った所である。放射能は強まりながらそちらに続いていたのである。先をこされたという気がしたのは事実である。私達も西山地区で強い放射能を測定した。こうして3年余にわたる私達の放射能測定が始まったのである。

（早大教授 当時九大教授）

## 石の上の影

渡辺 武男

広島は花崗岩の多い町であるが、そのほかいろいろな石やカワラやタイルもあった。爆心から500m、護国神社の周囲には、黒い安山岩の平たい玉石が敷きつめてあって、その表面に黄灰色の薄いガラスができていた。玉石の変色から、爆弾が落ちた時の石の重なり具合がわかるほどであった。ところが砂岩や珪岩のように、おもに石英からできている岩石の表面は、あまり変っていない。



それにひきかえ、カワラやタイルの表面にはいちじるしい変化が起っていたのである。

日本の家屋では、1軒の家に1,000枚以上のカワラがのっている。カワラはその地方の特色があつておもしろい。広島には伊予ガワラや西条ガワラが多くあり、ツヤのよいものもかなりあつた。爆心地の黒ガワラには、火傷の跡がはっきりと残っていた。黒いカワラの表面に、オリーブ色の薄皮ができていた。この薄皮は照射の直後、カワラが溶けてできたガラスである。水分が多かったためだろうか、ガラスにはあわだった跡がよく残されていた。オリーブ色に焼けただれて、火ぶくれになった気味の悪いカワラは、多くの人々の注意を集めていた。これを東京に持ち帰って顕微鏡でみると、空気のあわが、ガラスの中にはいっていることがよくわかった。

町の建物の上や石段には、そのときすわっていた人々の影がたくさん残っていた。舗装された道路のタールの上や敷石の上にも、爆発の瞬間の状態がそのままやきつけられていた。

とくに、爆心から950m、県庁の横の万代橋には、往来していた人々の姿がなまなましく焼きこまれていた。自転車に乗った人、歩いていた人々のかげも濃く、その人たちが大火傷を負った当時の悲惨なようすを想像し、思わずゾッとしたのを今も忘れることはできない。

(秋田大学学長 当時東大教授)

## 帰らぬ人びと

木村 毅一

広島に新型爆弾が落とされたとき、私の恩師、荒勝文策博士(京大)はおっしゃった。原爆か否かがわかるのは仁科君のところか、ぼくのところしかない。1日も早く現地調査をし、資料を採取してたしかめたい。荒勝先生にひきいられて京大の学術調査班は8月9日夜、京都を発って10日に廃墟の広島についた。京大班としての第1回調査である。資料を大学に持ち帰って調べたら、たしかに核分裂による生成物であることが判った。ついで8月13～14日第2次調査では約100カ所から系統的に資料を集めて放射能の検出をした。9月に入って第3調査団を出すことになり、私が団長格となって医療班として医学部の真下俊一、杉山茂輝教授以下のスタッフと合流した。一同の宿舎は大野陸軍病院の宿舎であった。

9月17日枕崎台風による豪雨、突然の山津波。そのとき、私たちのいた病舎の大半が倒壊、暗い海に向かって流出した。ふと気がついたら私は海の岩にすがりついていた。物理の6人のうち3人の若い研究者は帰らぬ人となった。医学部の真下、杉山両教授以下8名が殉職した。長崎で調査中に病死された東大医学部の袴田三郎氏とともに原爆災害調査団の貴い犠牲者として忘れることは出来ない。

(京大名誉教授 当時京大助教授)

## 新興善救護所のおもいで

柴田 一郎

空は悲しいまでに青く澄んで、大地はこの丘から下にのびてゆく石畳のほかは瓦礫の山、廻りの山の斜面は見苦しく焼けた茶褐色。昭和20年8月下旬の今は野戦病院化した新興善国民学校の屋上よりみた北方の景色である。そして私たちの下の階下に横たわっている人たちは……

今ここに生き残ったすべての人たちは次々に襲って来る確実な死の順序を待っている。髪の毛がぬけ始め、皮下に紫色の出血斑が現われれば、これは数日後の確実な死が待っているだけ。

「子供がこんなになりました」といって、顔には死の刻印のきざまれた幼児の、今はただ一人の家族になってしまったうら若い母親、その母の顔にも死の刻印が……

海軍から持って来た衛生材料も底をついてきた。もうあげられるものは私たちの血液ぐらいしかない。

私の血をあげた娘さんは、そのあと某大学の医師の採血の後、翌日、私が所用の為帰隊した留守中に「中尉さんによろしく」といって死んでしまったそうだ。この期に及んで感謝の言葉しか語らずに、死んでゆけた美しい魂。

わが持てるすべての力を出しつくし働いてくれた1ケ班の日赤のまだ教育不十分な看護婦さんたち。私にとって必ずしもなりたくもなかった医師であったことに最も生甲斐を感じた1カ月半。新興善の中でくりひろげられた地獄の中の人たちの精神の気高さ、美しさと善意と。私は今もあの人たちのことを考えると胸をかきむしられるようだ。あの人たちの死と献身とを生かすために私たちはどうしてこれに報いてゆけばいいのであろうか。

(嶺町病院長 当時針尾海兵団救護隊軍医)



草も生えぬといわれた  
長崎被爆地に芽生えたエ  
ビス草の放射能による斑。  
撮影・今野敬一

## 生物班として撮影に同行

中山 弘美

私は理研でアイソトープをつかって、植物や微生物の代謝の研究をやっていたのですが、理研には生物に対する放射線の研究をしている人たちがおり、門前の小僧という意味で見えておりました。強力な放射能をあのような広範囲にわたってあびせかけた武器の使用は始めてのことですから、人間や生物の身体への直接の影響はもとより、子孫にどのような影響を与えるか、放射線による突然変異に対し特に関心をもちました。あの時点では、人間や動物では時期が早すぎたのですが、植物では放射線を受けた種子が発芽しており、また焼けなかった部分からも新芽を出しており観察には絶好の時期と思われました。九大や現地の試験所の方々もこの方面の研究に手をつけておられました。(科研化学常務取締役 当時仁科研究室)

## 広島第一陸軍病院宇品分院

相原 秀次

宇品にながく住み被爆後治療に通った人びともその病院の正しい名を知らないのが船舶練習部内の救護病院である。被爆後最初に正門をくぐって入って来たのも一般の市民で、ここに診療所のあることを知っていたのである。その日のうちに数千人が収容され、その夜は停電の闇の中で人間の住む世界とは思えなかったという。

もともと患者収容の設備はない。臨時収容所となり、つづいて野戦病院となり、終戦では船舶医務機関とか衛生機関とか呼ばれた。やがて、原爆傷の治療が医学上の緊急課題となり、軍医ばかりでなく多くの学者が参加して原爆症治療の指針が求められるようになった。事実上ここが最初の原爆病院で、敗戦で軍、政府、官庁のすべてが統制力を失ったとき、この分院が原爆医学の中心であった。原爆症では多くの死亡者が出た。それは今日の医学の治療能力を超えていた。その告発はこの病院のデー

タに負うところが多い。もしこの研究がなかったと考えるとその重い意味がわかる。われわれ日本映画社の医学撮影班の広島取材も、この宇品分院から始まった。大橋成一軍医中佐の好意を忘れることはできない。すでにアメリカ側の調査団も来ており、日本側の引きあげの日もせまっていた。8月25日以降、正式に宇品分院の名が用いられた。

(当時原爆映画プロデューサー)

## 原爆映画医学編と私

服部達太郎

私は広島陸軍病院赤十字病院に出勤途上西大橋西詰の遮蔽物の全くない戸外で被爆した。混乱のため前進出来ないで一旦自宅に引き返すことにし泥雨に濡れて古田町古江に帰った。熱傷面は水泡を生じ、腫脹して疼痛も激しくなったので半壊の自宅にたどりついたまま、動けなくなりそのまま約2カ月を自宅療養で過した。10月4日に被爆以来始めて赤十字病院に行く事が出来た。同僚諸君にもなつかしく挨拶を交した。外来はまだ火傷や外傷患者で雑沓していた。そのとき重藤副院長から映画をとるので立ち合う様にといわれた。病室の患者も私にとっては始めて診るもので自分にも興味があり、包帯交換をし乍らその症状を説明して撮影に協力した。映画の撮影には諸準備に時間を要するもので、かなり長時間にわたった様に思う。最初は中央病棟3階から撮り2階を廻って1階病棟に移ってその2、3人目を撮影する頃私は廊下で突然激しい咳嗽発作に襲われた。遂に間断なく咳嗽が出るので居たたまれず映画撮影の完了しないままお詫びして休まざるを得なくなった。この喘息様咳嗽発作には其の後2カ月間悩まされたのであった。

聞くとところによると元来この映画は故仁科博士がいち早く提唱せられ、これに賛同された方々が、あの困難な社会事情の下にあって各々献身的な努力によって作製された貴重な資料である。

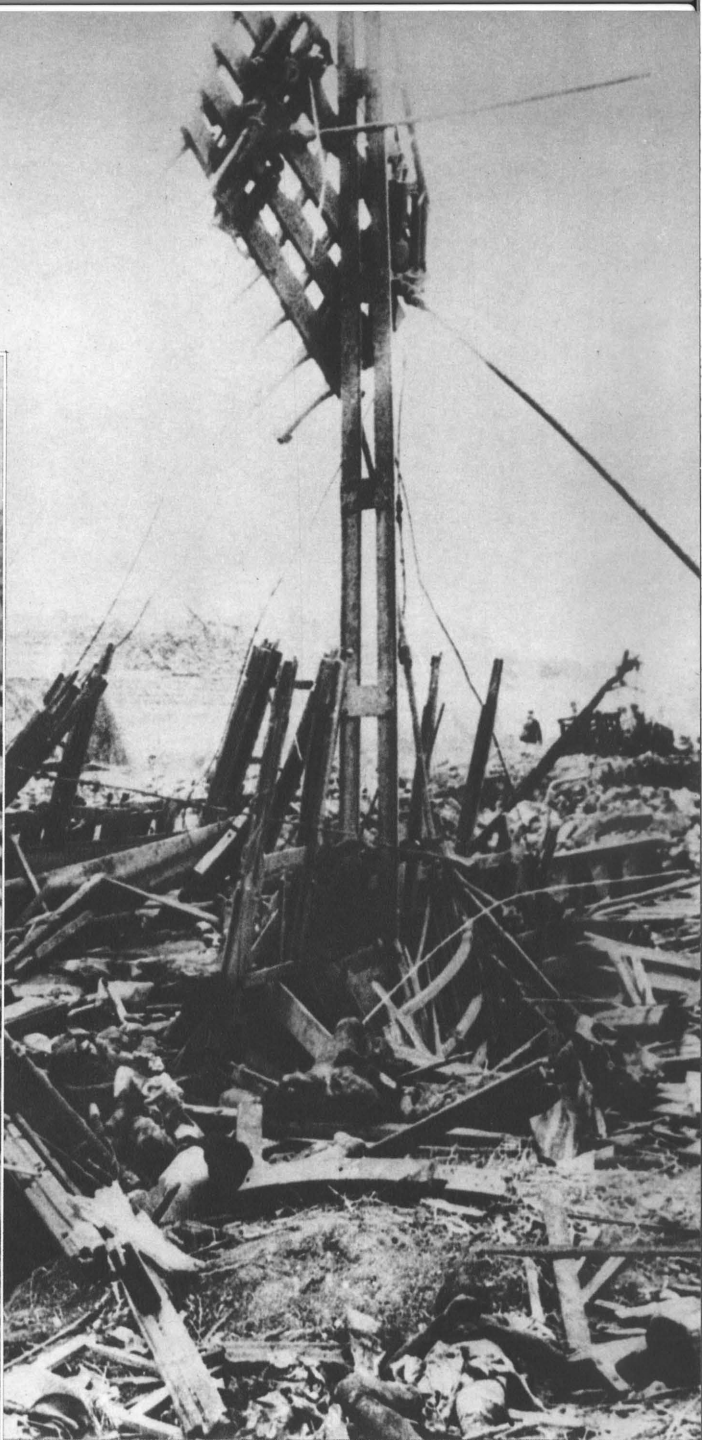
私はこの映画撮影に当られた加納、相原、山中氏等と再会の機会に恵まれてその奇縁を嬉しく思っている。

この映画によって原爆被災のすべての実情を伝え得るものではない。けれども被爆直後の写真とあわせて共に視覚に訴え得る最も有力にして且つ貴重なまとまった後世への資料であると信ずる。

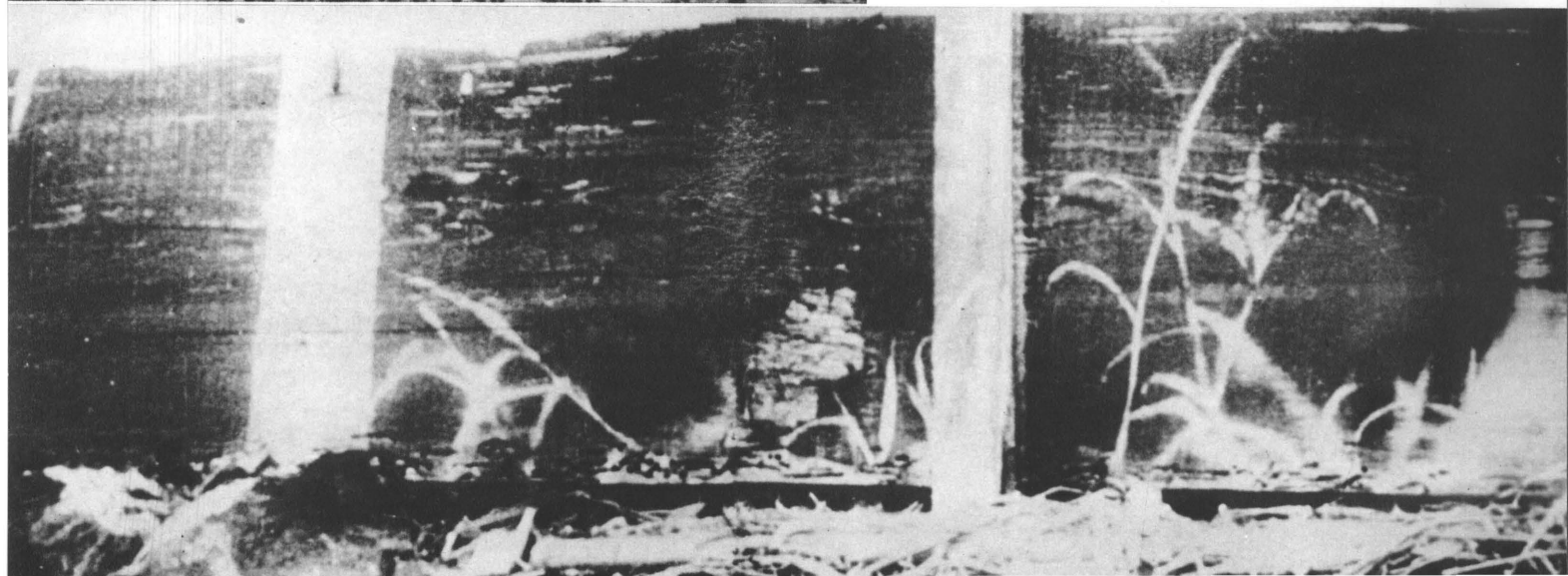
(横浜日赤病院長 当時広島日赤病院長)

長崎下ノ川鉄橋の際で被爆した電車、  
鉄柱にかかっているのは電車の屋根。  
乗客はほとんど放り出されて死亡、遺  
体も見える。 撮影 山端庸介

爆心から900m、長崎城山町マリア園  
に近い竹やぶ、一見して爆風は長崎の  
方が広島より強い。 撮影 松本栄一



映画撮影班が長崎淵神社付近で、こわれた  
家の腰板に美しい草の影を見つけた。爆心か  
ら約1km、熱線のつくったシルエットである。  
撮影 俣野公男







10月9日朝、長崎・井樋ノ口への避難の人  
びとのなかで、この少女だけが元氣に見えた。  
しかし彼女も足を挫いて立てない。

撮影 山端庸介

●七月末日発売

■判型——A4判特製380頁  
■図版——グラビア印刷185図  
■本文——267頁(挿図214図)  
■定価——10,000円(郵送料不要)

東京都千代田区神田錦町三ノ十四(〒101)

株式会社

光風社書店

電話 東京(二九一)〇二三八・二五〇七

振替 東京 二九三番

■執筆・資料提供 その他の関係者

## 学 術

秋月辰一郎  
宇田 道隆  
内田 正男  
大橋 成一  
木村 一治  
木村 毅一  
清水 栄  
塩月 正雄  
新妻 清一  
羽田野 茂  
半沢朔一郎  
御園生圭輔  
山科 清  
渡辺 漸

聖フランシスコ病院長  
東海大教授  
三共製薬中央研究所  
国立東京第一病院  
東北大教授  
京大名誉教授  
京大教授  
東京クリニック  
防衛庁技術研究本部  
東大教授  
科学評論家  
放射線医学総合研究所長  
山科病院長  
国立ガンセンター

## 写 真

菊池 俊吉  
林 重男  
宮武 甫  
松本 栄一  
山端 庸介故  
松重 美人  
岸田 貢宜  
尾糠 政美  
川原 四儀故  
川本 俊雄故  
中田佐都男  
木村 権一故  
山田 精三  
黒石 勝

小川 虎吉故  
岸本 吉太  
佐々木雄一郎

## 映 画

岩崎 昶  
井上寿恵男  
山中 真男  
奥山大六郎  
鈴木喜代治  
三木 茂  
俣野 公男  
今野 敬一  
栗田 玄忠故  
坂齋小一郎  
藤波 次郎

## 編集委員

山崎 文男  
田島 英三  
中山 弘美  
宮崎友喜雄  
玉木 英彦  
浜田 達二  
篠原 健一  
中根 良平  
嵯峨根遼吉故  
飯島 宗一  
三宅 仁故  
調 来助  
重藤 文夫  
服部達太郎  
横山 すみ  
加納 竜一  
相原 秀次

日本原子力研究所理事  
立教大教授  
科研化学株式会社  
理化学研究所  
千葉大教授  
理化学研究所  
早大教授  
理化学研究所

広島大学学長

長崎大名誉教授  
広島原爆病院長  
横浜日赤病院長  
仁科記念財団  
原爆映画プロデューサー  
原爆映画プロデューサー